

# 看護研究プロセスを通して 臨床看護師に培われた力と影響因子

毎川京子 近藤真理子

大阪府済生会中津病院 看護管理室

## はじめに

看護の質向上のためのひとつの手段として、看護研究の実践があげられ、多くの臨床看護師が看護研究に取り組み、学会などで発表を行っている。当院でも、以前から、個人的に看護研究に取り組み、発表している看護師もいたが、その多くは認定看護師であった。

そこで、看護部として、研究的態度の育成、看護の質の向上を目的とし、平成26年度より、臨床看護師に向けての研究指導体制を導入した。看護研究に取り組んでいる看護師たちの多くは「研究は大変だった」「でも達成感があった」と話していたが、看護研究の担当者として、それ以外にも何か得ているものがあるように感じた。そこで今回は、看護研究の指導を受講し、看護研究のプロセスを経験した臨床看護師に、どのような変化があるのか、どのような力がつくのかについて明らかにしたいと考えた。

## I. 看護研究の概要

- 1) 看護研究に取り組んでみたいと考えている看護師を6グループ程度募集(2～3月)
- 2) 1年間をかけて、大学の講師2名から指導を受ける(月に1回、2時間程度)  
その日や今後取り組む内容についての講義のあと、個別指導を受ける
- 3) スケジュール
  - ① 4～7月：研究テーマの設定、研究計画書の作成、倫理審査
  - ② 8～9月：研究の実施、集計
  - ③ 10月～12月：データの分析
  - ④ 1～2月：発表準備
  - ⑤ 3月：院内研究発表会
  - ⑥ 院内での発表会の後、院外への学会登録を行い、発表の機会を設ける

## 4) 受講状況

年度	対象者数・グループ数	受講の経過
平成26年	17名・5グループ	1グループ途中辞退
平成27年	17名・6グループ	
平成28年	13名・4グループ	1グループ途中辞退
平成29年	21名・6グループ	
平成30年	17名・5グループ	1グループ途中辞退

## II. 目的

看護研究の実践プロセスを通して、臨床現場の看護師に培われた力と影響因子について明らかにする

## III. 研究方法

- 1) 対象：平成29年度の受講生で、1年間、研究に取り組んだ看護師16名
- 2) 実施期間：平成30年2月
- 3) インタビュー(半構造化面接法)の内容
  - ①「研究を行って楽しかった・良かったことはどのようなことでしたか」
  - ②「研究を行って困難・大変だったことはどのようなことでしたか。それら困難をどのように乗り越えましたか」
  - ③「研究を实践してこの1年であなたにどのような力が身につきましたか」
  - ④「その力は、今のあなたにどのような影響を与えていると思いますか」
  - ⑤「研究の経験が、今後の看護実践やスタッフ育成にどのように活かせると思いますか」
- 4) 分析方法(質的帰納的研究)  
聞き取った内容を逐語録に起こし、コード化、カテゴリー化し、質的・帰納的研究方法により分析する
- 5) 倫理的配慮  
看護部の倫理委員会の承認を受け、対象者から同意書を得て実施

IV. 結果

15名を対象にインタビューを実施，対象者の平均年齢は36歳で，臨床経験は平均14年であった。

逐語録から500のコードを抽出，下位カテゴリーを16サブカテゴリーにまとめた（表1）。下位カテゴリー，サブカテゴリーを最終的に5つに分類した。上位カテゴリーは，【本質を焦点化するための他者からの情報のinput-output】・【自らの力で新たな課題を発見し乗り越える意思の強さ】・【事象を捉える視野・視点の拡大】・【臨床研究の実践基礎能力と臨床での活用】・【根拠を重視した教育的価値観】が抽出された（表2）。

また，影響因子として，【メンバー間の人間関係】【臨床研究の面白さ・必要性】【指導者からのアドバイス】【臨床で培った経験値】が抽出された（表3）。

表1. 下位カテゴリー

下位カテゴリー	コード (500)
エビデンス	スタッフに経験でなく根拠に基づく看護をして欲しい
エビデンス	根拠・裏付けを明確にしないと一つのものが生まれない
主観的思考の気づき	調査をして現状を知り、いかに自分の主観で考えていたかわかった
新たな価値観	経験に頼っているのは駄目だと、いい意味で崩された
視野の拡大	自分の偏った見方ではない人の価値観を知る機会になって良かった
分析する力	データの集計や統計で、データ・数値の出し方がわかった
文章化する力	文献を読んで文章表現の仕方が勉強になった
異なる意見をまとめる力	4人の異なる考えをひとつにまとめていくのが大変だった
課題の焦点化	テーマを絞らないとデータが出せないということがわかった
他者の意見を聞く力	看護研究をしなければ自分の考えのずれはわからなかった
研究指導の視点	文献に関する興味を持てるようになったので後輩指導に活かせる
エビデンス	医師との交渉で文献を元に意見が言えるようになった
看護に活用する力	研究で経験し、学んだことを日々の業務に活かしていく
やりとげる力	やり遂げる力がより強くなった一つの出来事になった
再チャレンジ	今だったら違うテーマの研究をしたいと思う
時間調整力	予定を立てて取り組む必要性が身にしみた

表2. サブカテゴリー・上位カテゴリー

上位カテゴリー (5)	サブカテゴリー (16)
本質を焦点化するための他者からの情報のInput-output (176コード)	情報を集め読み解く力がつく (86)
	本質を焦点化するための考える力がつく (35)
	他者の意見や価値観を受け入れる力がつく (25)
	他者の考えを取り込み話し合う力がつく (23)
	自己の意見を文章化し、他者に伝える力がつく (7)
自らの力で新たな課題を発見し乗り越える意思の強さ (89コード)	困難な課題を乗り越える力がつく (53)
	計画的に時間調整する力がつく (19)
	新たな課題に取り組む力がつく (17)
事象を捉える視野・視点の拡大 (67コード)	広い視点で物事を見る力がつく (34)
	客観的に自己を見つめる力がつく (26)
	研究を通して新たな価値観が芽生えた (7)
臨床研究の実践基礎能力と臨床での活用 (64コード)	研究を理解し指導する力がつく (51)
	研究成果を臨床に活用する力がつく (10)
	研究を通して論文のクリティークの力がつく (3)
根拠を重視した教育的価値観 (33コード)	物事を考えるときに根拠を大切にすることがつく (18)
	スタッフに対し教育的な見方をすることがつく (15)

表3. 影響因子

影響因子	コード
メンバー間の人間関係	面識のあるメンバーとできるのは達成できたひとつの要因になる
	皆で意見を出して、皆で考えて、皆でやるという一体感があった
臨床研究の面白さ・必要性	課題の解決のためには皆で研究することが大事だと思った
	研究をすることによって問題が浮き彫りになった
指導者からのアドバイス	自分で考えるだけでなくプロの助言を得ることを身に付けた
	研究をするまでは見て学ぶことが多く相談するということもなく育ってきた
臨床で培った経験値	経験年数を経て得た経験量と知識量が研究をすすめる上で役にたった
	経験年数を経て引き出しが増えていると気づいた

## V. 考察

研究のサポート体制を組織的に整えたことで、対象者たちは【本質を焦点化するための他者からの情報のinput-output】【事象を捉える視野・視点の拡大】という力を獲得していた。グループメンバーと討議をする中で、他者との認識の違いを理解すること、自分の意見を伝えることなどの重要性や、自分の認識の偏りに気づいたという内容が多く、【メンバー間の人間関係】や【講師からのアドバイス】から客観的に自己の思考パターンを見直し、広い視点で物事を見る力がついていると考えられる。

さらに、今回の経験を今後活かすための【臨床研究の実践基礎能力と臨床での活用】【根拠を重視した教育的価値観】という力については、研究プロセスの中で【臨床研究の面白さ・必要性の認識】を捉えられたことや【臨床で培った経験値】が影響因子として考えられた。本研究の対象者の経験年数が14年と長いことから、既存の実践能力や教育的価値観はあったと推測されるが、その能力や価値観は研究の経験によって、「研究の臨床での活用」「根拠を重視した教育的価値観」に変化したと考えられる。

【自らの力で新たな課題を発見し乗り越える意思の強さ】という力については、研究の経験を通して研究の必要性を認識したことから、自己の課題、臨床現場での新たな課題に気づいている。また、その課題の解決のためには、周囲のメンバー、他者との関わりや協調が重要と認識していると考えられた。

## VI. 結論

看護研究の実践プロセスを通して、臨床現場の看護師には、本質の焦点化、視野・視点の拡大、根拠を重視した教育的価値観などの力を得ていた。

その影響因子として、メンバー間の人間関係、臨床研究の面白さ・必要性の認識が示唆された。

### 文 献

- 1) 黒田裕子：看護管理シリーズ，看護研究第二版，日本看護協会出版会，1996
- 2) 滝島紀子：臨床看護師の行う「看護研究」体験が及ぼす仕事上の変化－仕事に対する思い・仕事の仕方の側面から－，川崎市立看護短期大学紀要，2016，21(1)，49-57
- 3) 鈴木久子，山本さつき，佐藤奈津子，他：A病院の看護研究に対する意識－看護研究経験者へのアンケート調査，日本看護学会論文集:看護教育，2010，342-345
- 4) 加納典子，福田由紀子，桂川純子，他：A病院における看護職の研究に関する実態調査－困難と感ずる要因と支援方法－，日本赤十字看護学会誌，2008，8(1)，74-80
- 5) 前野真由美：臨床の場における看護研究の難しさと求められる支援，静岡県立大学短期大学部研究紀要，2009，22，9-16
- 6) 九津見雅美，中岡亜希子，八木夏紀，他：病院看護師の看護研究取り組みへのサポート体制の検討－大学と病院のユニフィケーション推進に向けて－，千里金蘭大学紀要，2011，8，13-131
- 7) 宮芝智子，坂下玲子，西平倫子，他：看護管理者が知覚する臨床研究の意義，兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要，2014，19，31-40
- 8) 井上知美，中野宏恵，東 知宏，他：看護研究における臨床看護師が抱える困難，兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要，2014，21，23-35
- 9) 伊藤洋子：院内看護研究の指導過程における研究的視点の啓発と支援，飯田女子短期大学紀要，2006，23，57-73